

(別紙2)

## 審査の結果の要旨

氏名 太田 圭

本論文は、東北地方太平洋岸地域を中心とした縄文時代東日本の膨大な考古学資料を知悉的に集成し丹念かつ周到な分析を加えて、縄文時代中期/後期移行期の社会変容プロセスを総合的に明らかにした、実証性に富む独創性の高い研究成果をまとめたものである。これまでの研究では、縄文文化・社会は中期/後期を境にして、定着的な狩猟採集社会が順次発達・繁栄する前半期とその社会が崩壊して各種の信仰・宗教イデオロギーが支配する停滞的な後半期に二分され、その原因を寒冷化による気候変動に求めるという単線的な発展段階論的理解が定説であったが、太田氏は大量の資料を博捜することで、その移行の様相が各種の物質文化や小地域ごとに連続的かつ複雑に入り組んだきわめて錯綜した状況であったことを丁寧に解明することに成功した。

本論文は8章からなり、第1・2章では研究の目的、対象と方法について説明したのち、第3章でこれまで研究を阻害していた東日本における広域的な土器編年の構築に取り組んだ。土器の広域編年は、各地の物質文化の具体的な様相を相互に比較するための時間軸になる。この新しい精緻な土器編年を用いて、第4章では土器型式・土器群間の地域間関係を議論し、第5章では竪穴住居と遺跡分布・居住形態から移行期前後の人口動態を明らかにしている。第6章では配石遺構、第7章では土器埋設遺構という具体的な遺構の分析を通して、氏の言う地域性を示す具体像の時間的・地域的な変化の詳細を跡付けた。

第8章は本論文の結論にあたる。住居数の変化に基づく人口急減現象が実は小地域ごとに著しく異なり観察できない地域もあること、各種遺構に見られる時空間での変化がきわめて多様でありかつ重層的であること、土器型式・土器群の複雑な地域的消長関係などを指摘して、移行期の変革要因として従来から指摘されてきた世界的な気候寒冷化(4.3ka イベント)のような単純な環境要因だけでは説明できないことを明確に提示した。さらに中期/後期移行期が、縄文時代を通じて繰り返し現れる変動期の社会変容プロセスと性格を共有していながらも、それが最も大規模かつ長期にわたり継続した結果であり、縄文狩猟採集社会の原理で説明可能と理解したことは高く評価できる。

惜しむらくは、移行期前後の食料資源利用の追求にやや手薄な点があることが挙げられるのだが、これは当該地域の調査事例の僅少さに起因する課題でもあり、本論文の意義を損なうほどのものではない。

以上より、本委員会は博士(文学)の学位を授与するにふさわしいと認めるものである。